竹取物語

かぐや姫の生ひ立ち　―現代語訳―

今となっては昔のことだが、竹取の翁という者がいた。野山に分け入って竹を取っては、さまざまなことに使っていた。名前を讃岐の造といった。その竹の中に、根元が光る竹が一本あった。不思議に思って近寄って見ると、筒の中が光っている。それを見ると、三寸くらいの人が、実にかわいらしい様子で座っている。翁が、言うことには、「私が朝夕いつも見る竹の中にいらっしゃることで、分かった。子になってくださるはずの人であるようだ。」と言って、手の中にひょいと入れて、家へ持って来た。妻の嫗に任せて育てさせる。かわいらしいことはこの上もない。実に小さいので、籠に入れて育てる。

竹取の翁が、竹を取るときに、この子を見つけて以後に竹を取ると、節と節の間の空洞の一つ一つに、黄金がある竹を見つけることが何度もあった。こうして、翁は、だんだんと裕福になってゆく。

この幼子は、育てるうちに、ぐんぐんと大きく成長してゆく。三か月くらいになる頃に、一人前の大きさの人になったので、髪上げなどのことをさまざまに準備して、髪を結い上げさせ、裳を着せる。帳の中からも出さずに、大切にかしずき育てる。この幼子の顔だちは、清らかで美しいことこの上もなく、家の中は暗い所がなく光が満ちている。翁は、気分が悪く苦しいときでも、この子を見ると必ず、苦しいことも治まってしまう。腹が立つようなことでも心が静まった。

翁は、（黄金の入った）竹を取ることが長く続いた。富裕で勢力のある者になっていった。この子はたいそう大きくなったので、名前を、御室戸斎部の秋田を招いて、付けさせる。秋田は、なよ竹のかぐや姫と付けた。このとき三日間、宴会を開き音楽を奏でて楽しむ。さまざまな歌舞音曲を演奏して楽しんだ。男は誰でも構わず招き集めて、たいそう盛大に管弦の宴を催す。この世の男は、身分の高い者も低い者も、何とかしてこのかぐや姫を妻にしたい、会いたいと、うわさを聞き、恋い慕って心が乱れる。